

【記者会見資料（2011年12月27日：火）】

## 斎場御嶽の概要

琉球王国時代（1429年～廃藩置県）より沖縄は太陽の昇る東方を「あがり」と呼び、聖なる方角として崇めていた。沖縄本島の東側に位置する南城市は、琉球開びやく神アマミキヨや穀物起源神話の舞台となり、やがて琉球の国家統一を成し遂げた英雄：尚巴志（しょうはし）を生み出す。琉球が徐々に王国としての体制を整えてくると、東方の聖地は国家体制に権威を与え、霊的に保護するための国家的な儀礼が行なわれる地になっていった。聖地を巡拝する「東御廻り（アガリウマーイ）」は、先達に敬意を表する慣習として現代に受け継がれ、琉球の歴史を幾重にも重ねた南城市の特徴である。

### 【南城市観光振興計画の基本理念】

本市まちづくりの根幹をなす『南城市第1次総合計画』（平成20年）との整合性、実現性のある施策立案・継続的な実行体制構築を目指して、『南城市観光振興計画』（平成20年）が策定された。

続いて「南城市都市マスタープラン」の策定と景観行政団体登録（平成21年）、『南城市歴史文化基本構想・保存活用計画』（平成23年）が策定された。

上記の諸計画に共通して描かれている「地域資源の保存・継承・活用」は、南城市観光振興計画の理念にも活かされ、基本理念として《自然・歴史・文化が織なすハーモニー ～こころとからだの健康・癒し なんじょう～》としてまとめられた。



世界遺産：斎場御嶽

### 【世界遺産登録前後の状況と課題】※別添資料参照

国指定史跡である斎場御嶽は平成6年から13年度にかけて保存修理事業を実施し、参道や基壇等の修理を完了した。修理事業を始める以前は石畳の参道が損壊し、倒れた大木が道を塞ぐなど大変に歩きづらい場所であった。その為来訪者の数も少なかった。

整備事業が進むに従い斎場御嶽は往時の姿を取り戻し、客数は徐々に増加していった。平成12年（2000年）に「琉球王国のグスク及び遺産群」として世界遺産に登録されるとさらにその数は増加し、駐車場・公衆トイレ・緑の館セーフア等の建設を経て、平成22年度実績では35万人を数えている。

斎場御嶽の特徴は、「琉球王国時代の精神文化の象徴、王国随一の聖域」であり、世界遺産推薦の理由もそこにある。そのため、この地を訪れる方々から「あまりにも来場

者が多過ぎて聖域としての雰囲気損なわれている」「入場者数の制限が必要ではないか」等々の意見が以前から寄せられていた。

さらに、石畳道の表面劣化や摩耗、周辺の表土流出などが進んだことによる遺構の損壊が課題となっている。特に石畳の表面摩耗によるスリップは、事故につながる危険性が高いことから注意喚起や事故防止対応策を講じているが、十分であるとは言い難いのが現状である。

御嶽（うたき）や拝所がパワースポットと呼称されて久しいが、本来の意味が「神聖な場所」であることを考えると、活かす取り組みはその地を尊敬することから始めたい。まるでスタンプラリーのように、パワースポット巡りをすることに対する疑問もある。本来は祈りの場所である所で、携帯電話やデジカメで写真を撮ることに夢中になり、拝所へは見向きもしない人がいる。

琉球の歴史は全国的にも特色があり、説明がないと解りづらいと言う側面もある。そこを訪れる方々へ正確で丁寧な情報発信をすることから始め、護り活かし受け継がれる仕組み作りを考えたい。